

農業経営の全体を可視化 ～出来ることから無理のない経営改善を継続する～

採択事業者名 テラスマイル株式会社

コンソーシアム構成員 実装先:株式会社百姓百品村

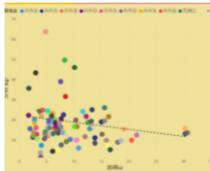
事業概要

目的

生産から販売までの農業経営全体に対し、RightARMを軸としたデータの可視化、業務改善提案を実施する。本実証でのケースをモデルケースとして、県内の自治体(市や町)やJAを軸としてデータ駆動型農業の横展開の準備を行う。

課題

農業経営では、様々なデータが点在し独立している。それらを、収集・可視化・分析し、データに基づいた農業経営の意思決定を行うことが必要である。しかし、データを収集する事自体の手間や、折角蓄積したデータを可視化し、示唆を得ることに高いハードルがある。



解決策

生産者にとって、データ駆動型農業が当たり前となるように、伴走支援を行い、生産者が自ら自走出来るように支援を行う。データの取得に対する際にも、「アグリノート」などのツールを活用することで、入力の手間を最小限にし、また、生産者が取り組みやすい箇所からの改善を提案することで、データ駆動型農業へのハードルを下げる。



取り組み内容

- 圃場の評価
RightARMを用いて、各圃場の特徴を可視化・評価
- 作業生産性の評価
「アグリノート」のデータをRightARMにて利用し、各作業者の作業を可視化
- ロスの可視化
図を用いて、ロスが発生していると思われる部分をディスカッション。試算で影響を把握
- 調整作業の評価
ビデオ分析にて調整作業を評価
- 販売先・運送コストの見直し
過去取引の記録を分析



検証項目

- 圃場の成績付け
圃場の労働時間の計測により、圃場ごとの労働生産性を算出、各圃場までの距離や各圃場の特徴(夏期、冬期の収量差)なども加味し、圃場の成績を作成
- ロスの削減
「未利用圃場の保持コストの試算」「調整作業の評価」等を通じて、削減しうるロスを試算。
- 販売時の売上増加
販売先や運送コストの見直しによって、交渉の余地がありそうな取引先を可視化。(別の取引先の紹介)

取得データ

気象データ、市況データ、生産データ(収量)、労務データ(作業者、作業内容、作業時間)、販売実績データ(各販売先への売上、取引量、輸送費)…等

データ活用による考察・示唆

短い期間ではあったが、「アグリノート」を利用した労務データの活用が出来、データ取得の選択肢が広がった。販売実績やロスの可視化など、交渉次第で、直ぐにでも改善できる箇所も見つかった。

成果と今後

成果(含む想定)

生産者の抱える、生産から出荷までの農業経営の課題に対して、データ駆動型農業を用いて解決を図る。

		実装前	実装後(～今年度)	今後3年
定量面	金額	➢ -	➢ 生産者の経営改善	➢ 生産者の経営改善
	重要指標	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 生産者は独自で様々な記録を保持しているが、活用できていない。 ➢ 収支の面ではギリギリ黒字と言った状態。 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 1生産者にて実装 ➢ ロスの可視化によって、削減の可能性がある金額を算出。 ➢ 圃場選択の効率化や契約の見直しにより年1%程度の製品販売の増加 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 新規生産者5名(今年モデル事業者と同規模の生産者を想定) ➢ 自治体主導の生産者勉強会(2自治体で5名ずつほどの勉強会を組織)
定性面		➢ 利益が思った通りに出ていないという漠然とした不安がある	➢ 今まで感覚としてしか見えていなかった部分が、数字として見える様になり、次の行動を考えられるようになる	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 国の補助事業等を利用し普及拡大。 ➢ 産地として「データ駆動型農業」の定着を目指す。

次年度以降の実装計画/見立て

実装の拡大として、個々の生産者から利用料を頂くという形よりは、自治体(市や町)やJAに導入いただき、個々の生産者が、RightARMを用いてデータ駆動型農業を実施する形での普及を考える。(個人としてではなく、部会や産地としての単位で、切磋琢磨して自走する形で、ツールとしてRightARMを用いて頂ける形が望ましい。)現状では、自治体の担当者レベルでも「データ駆動型農業」への意識に、ハードルが高いことがあり、「スマート農業」への意欲があっても、「データ駆動型農業」に関してはそうでもないということも有る。県内でも、非常に興味を持って頂いている自治体もあるので、そういった所から少しずつ活動を広めていく。